

間宮英宗の来別に關して

佐藤嘉一

一

鎌倉円覚寺の管長でもあつた釈宗演門下の逸足に間宮英宗（まみや えいじゅう）がいた。英宗はアララギ派の代表歌人伊藤左千夫、平福百穂、斎藤茂吉、土井文明等と一時期交わりがあつた。特に左千夫との交わりは深く、そのことから私は英宗に少なからぬ関心を持ったのであるが、だんだん尋ねていくと、別府市に何度も訪れていることが明らかになつた。

このことの大筋は、現在休刊中の雑誌「大分アララギ」九号に掲載したことがある。また、間宮英宗と伊藤左千夫の交流を中心にした一文を、アララギ地方誌「リゲル」（福岡市、平成五年一〇月号）に掲載した。ここではアララギ派諸歌人との交流を念頭に置きながら、英宗の経歴と来別の様子を中心に記したい。

二

左千夫と英宗を前に、その後に茂吉、山本董湫、文明ら五人の並ぶ写真がある。私の知る範囲では、この写真は三回ほど各書に掲載されており、一枚は斎藤茂吉「短歌一家言」（昭和二十二年一月、斎藤書店）のなかと、もう一枚は「斎藤茂吉全集」再版第二十卷（昭和四十八年二月、岩波書店）の「月報2」に収められている。さらに一枚は「左千夫全集」第五卷（昭和五十二年四月、岩波書店）に巻頭写真として掲げられている。ここに示すのは「左千夫全集」所載のものであるが、写真の下の注記をそのまま記すと「明治四十二年五月頃、無一塵庵庭前にて、前列左より左千夫・間宮英宗 後列同じく斎藤茂吉・山本董湫・土屋文明（撮影・木村秀枝）」とある。



明治42年5月頃 無一塵庵庭前にて 前列左より左千夫・間宮英宗、
後列同じく齋藤茂吉・山本董湫・土屋文明（撮影・木村秀枝）

明治四十二年当時、英宗は三十八歳である。左千夫は四十五歳、茂吉は二十八歳、文明は丁度二十歳であった。この写真を見て後年（昭和四十三年）、土屋文明は次のような歌を作っている。

青竜寺英宗の中に我等立つ写真かすかに無一塵庵のおもかけ

端麗の僧英宗の後にて手織木綿の田舎少年土屋文明
袴短く着て口髭の齋藤茂吉医科大学学生か新医学士か

「続々青南集」中の「富士山麓雑歌」全三十首より

写真注記にも文明の歌にも見える無一塵庵は、当時の東京市本所区茅場町で乳牛を飼い、搾乳業を営んでいた左千夫の居宅のことである。翌四十三年五月、貧乏ななかを苦心して茶室唯真閣を作るが、八月、床上四尺に及ぶ水害で傷んでしまう。その前の様子を伝えるもので、そうしたことから「写真かすかに無一塵庵のおもかけ」は実感のある句といえる。明治四十二年は文明にとって大事な年であって、旧制高崎中学校を開校以来の秀才

といわれて卒業を迎えたものの、経済的な理由から高等学校進学は考えてもいなかった。同校の国語教師村上成

之がその才幹を惜んで左千夫に相談し、学資援助者を求めたところ、左千夫も真剣に斡旋にあたり、千葉県酒造家寺田憲の援助を受けることになった。当時の一高入試は七月で、入学は九月であったが、四月十日に上京、左千夫宅に寄食し、牛舎で働き牛乳を配達していた。写真真は丁度その頃のものであったから、「田舎少年」と自身を描いて誠に二首目の歌の通りであったろう。茂吉は当時東大医学部の学生で、卒業試験を受ける寸前になって腸チフスを病み、結局留年することになるが、写真はその病に罹る一か月ほど前の姿である。

明治四十二年頃はアララギ誕生の前で、茂吉も文明も後年のような大歌人に成長していくことは自他ともに予想していなかった。言わば揺籃期もかなり初期の時であったが、それだけに若々しい気風は十分であったと思われる。そのなかに、作歌には直接関係しないながら、間宮英宗も顔を出しているのは、作歌活動、文学活動に関してより広く豊かな土壌を形作ることを積極的に考え、そ

の立場から広く人との交わりを進めた左千夫の姿勢を示すものである。

左千夫は英宗を評して「洒落で能く人に交り頗る当世才子の風があつて、一見隅に置けざるものの如きも、内行清徹一切の醜欲を断つて居る。好んで維摩経を講じ、権門勢家固より眼中に無いのだ」(「三ヶ月湖遊記」明治四十四年記 左千夫全集第三巻所収)と言うところ、英宗の人となりをよく伝えていると思われる。

三

英宗が住職であつた富士山麓御殿場の青竜寺は、臨済宗の一寺である。このことから別府市内の臨済宗の寺を尋ねれば、或は英宗の様子がさらに明らかになるかと考えた。

明治十三年の南小学校開校までは、その前身的な位置にあつて学問の寺といわれた浜脇河内の修福寺を尋ねたところ、住職中川昌山氏は、幼少の頃より大分市の万寿寺に修業に赴いており、英宗を同寺で何度か拝したことがあるとのことであつた。後述するが、さらに修福寺に

も昭和初年英宗が見えているのも聞くことができた。

中川氏の話しによれば、英宗は静岡県引佐郡の方広寺の管長であったから、そこへ問合せれば詳細に教えてくれるとのことであった。早速同寺に手紙を出したが、方広寺は臨済宗方広寺派の本山で、建徳二年（一三七二）開創の古刹。境内には重文の七尊大菩薩堂もあり、本堂内部には近衛文麿の書いた「扶桑靈山」の額などもあるという案内記も添えた懇篤な返書を頂戴することができた。以下、それを抜書きしながら関連する事項を記すことにしたい。

間宮英宗は明治四年十月一日、愛知県中島郡間宮吉雄の次男として誕生。九歳で出家した。前出の土屋文明の歌にも見える青竜寺の請に応じたのは明治三十七、八年頃である。釈宗演門下とこの小文の冒頭に記したが、日露戦争当時宗演は軍隊布教師を兼ねており、それを継いで英宗は第三軍の布教師となっている。第三軍は旅順攻城の乃木軍で、あの凄惨な戦場に布教師として赴いたこととなるが、その辺の記述は方広寺からの手紙には見当らなかつた。青竜寺より戦場に臨んだことは、左千夫の

「三ヶ月湖遊記」の終り頃の「記念の尺八」と題する文中からも確かめ得る。旅順で宮崎大尉なる人と殊のほか親しくしていたが、大尉の戦死により仏名を与えて読経した。その縁で故大尉の老母より尺八を贈られた。それを霧の流れてくる湖心で左千夫らに聞かせる箇所がある。「和尚は幼時より尺八を好み習うて、今は和尚唯一の道楽で且つ得意とするところ」と左千夫は記している。

明治四十二年頃（上掲写真に写った頃）には、一時清水市の鉄舟寺に移り、禅道教義講習会を主管した模様である。その後、各地の寺の住持を努め、各所で説法を聞き、「禅道講話」「臨濟録夜話」等の著書を残しているという。

方広寺の管長には大正七年十二月より大正十五年十月まで就任し、その後、昭和四年に京都高野に栖賢寺を興して閑栖の山房とした様子である。しかし各地より説法の招請が相次ぎ、到底閑栖にはおれなかつたようである。日華事変から太平洋戦争へと戦いが拡大するなかで、満州、華北、華中と歩き、演法を行っている。昭和二十年一月、上海軍司令官小林信男の要請によってその地へ渡つた。戦歿将兵の慰霊と、八年にもわたる戦争で傾いた将

兵の精神を、禪によって豊かならしめる願いが小林司令官にあったものかどうか、その辺は想像するしかない。すでに中国戦線では湘桂作戦も行き詰まり、敗色日毎に濃くなった三月二十一日客死した。七十五歳であった。

四

間宮英宗が別府を訪れた最も早い時期は、昭和二年四月と思われる。

修福寺には傘形をした告知風の板があったが、それに

「来ル四月 自廿四日 至三十日 一週間 大紋稚児

戒師万寿寺紫山老大師 講師方広寺前管長 英宗老大師

当山云々」と、英宗の名を明らかに記している。これは

同寺開基五百年遠忌とともに入仏供養の大授戒会を催す

ことを示すものである。同寺に残されている記録による

と、県内四十数寺の関係者が参集し、戒師足利紫山、講

師間宮英宗、布教師村田物外を中心に多くの稚児も加わっ

た壮麗な会であったようである。

四月二十四日には、その頃秋葉神社横にあった蔵内二郎兵衛の別邸より行列は出発した。道の両側には一行を

迎える人垣が続き、それを縫うようにして秋葉通を下って中浜筋に至り、そこを南進して松原公園の東側を通過して浜脇に入り、河内へと至った如くである。その日は大正天皇奉悼会、二十五日には法会中祈祷会、二十六日は入仏供養、二十七日は開基五百年忌を執り行い、七日目は大総供養を行うという内容のものであった。臨濟宗を代表する高僧が、新緑のあざやかなこの時季に揃って仏事を催したことは、同寺開山以来の大事業であったに相違ない。

五

その後、英宗は禪の普及のための啓発活動を行い、雑誌「禪林」を発行してその普遍化に尽したようである。

この雑誌を丹念に見ていけば別府市にいつ頃来たかも明らかになると思うが、今はそれを確める折がない。

もともと英宗が来別することになったのは、炭鉱で産を成した麻生太賀吉の帰依からである。現在の中央公民館の辺に麻生別荘があって、南北に横断する道路を作ることから、その庭が区切られて様子も変わった経緯がある

が、道路の開通以前に英宗はその別荘を禪の修養道場とし、名付て程道会とした如くである。(後年、万寿寺の大井裁断が別府で柏樹会、菱花会という参禪の会を催していたそうであるが、それと趣旨を同じくするものであらう。)

昭和十一年頃から何回か来別したことは明らかであり、それには一時アララギ会員であった丸山待子もかなり関与している。アララギ二十五周年記念号という大部な雑誌が昭和八年三月に刊行されたが、それに収載の名簿によると、丸山待子は大正十三年十一月にアララギに入会しようである。(昭和二年三月までの短期間ではあるが)。昭和三年に大分アララギ歌会を作った瓜生鐵雄氏から「丸山待子というなかなかの才媛がいた。」と戦後何度か聞いたことがあり、仲間の面倒をよくみるし、気持ちのしっかりした女丈夫でもあったらしい。市立図書館蔵で、諸誌をコピーし、スクラップブックに収めている「佳人丸山待子」を見ると、手広く青筵問屋をしていた素封家小松屋に生まれ、のち大分第一高女に進み、その第八回卒業生とある。二十九歳で夫を亡くし、以後、昭和

十六年九月四十九歳で歿するまで生家で過ごした模様である。

偶然入手した「丸山待子歌集」付載の略年譜の昭和十一年の所に「間宮英宗禪師の別府程道会の世話を始め」と記されている。「世話を始め」とあるから、複数の人々のなかから出でて、英宗との諸連絡や参禪上の諸準備に携わったものであらうし、以後、幾回かそうしたことが続いたのを示すものと考ええる。そしてこれはまた、英宗が程道会を主催するため幾回か来別したことを推測させるものでもあらう。なお、「佳人丸山待子」によると、程道会で初めて般若心経の内奥を聴き、経本を手にしたとのことである。

「丸山待子歌集」の略年譜には、すでに大正十二年に足利紫山の禪門に入るとあり、さらに昭和元年(実際には元年は数日しかないのであるが)には奥大節より禪を学ぶと述べている。足利、奥両師とも万寿寺から法広寺の管長に赴いているようであって、この辺にも間宮英宗に従って禪を学ぶという繋がりが自ずと形づくられたとも考えられようか。なお、彼女の墓は万寿寺境内の亡

夫の墓に並んであり、法名は松濤庵心月明照大師といわれる。

程道会を開いていた麻生別荘のその場所を名づけて程道庵と言ったが、そこを訪れた閩宮英宗は、長期にわたって滞留していたのではなく、別府からさらに近県各地の参禅の会に出席していたようである。方広寺からの手紙によれば、大正四年には福岡市の聖福寺の開山光国師、栄西禅師の七百年忌法要があり、その説教師として出向いた由である。聖福寺は「扶桑最初の禅窟」といわれるわが国最初の禅寺で、現在でも護照院、幻住庵等九つの塔頭を残している名刹である。九州に入ったら英宗は先ず聖福寺を訪れ、ここを基地として日豊本線を下って別府に來たかと思うし、或は大分市の万寿寺に至って主な滞在所とし、時には別大電車に乗りながら別府程道会に臨んだこともあつたらうと想像している。

はじめに記した伊藤左千夫と閩宮英宗との関係について再び戻るが、左千夫は明治三十六年四月に高嶋米峰を中心にした雑誌「新仏教」同人に加わっており、仏教へ

の関心が縁となつて英宗との交わりが始まつたと考へている。三十八年頃には親鸞に傾倒し、歎異抄を盛んに読んでゐる。この辺は英宗とは宗派を異にしているけれども、左千夫の性情から推してみると、必ずしも宗派の別に拘泥するところはなかつたようだ。英宗もまた宗派の違いを固執するような小器ではなかつたらう。信仰と趣味を論じて短歌の作風次第に改まり、内面的に深化した歌を作つた左千夫の方向と、英宗の考えと共鳴し合う面が大きかつたと推測しているところである。左千夫が発した諸文を余すなく収め、且つ精緻な校訂で知られる「左千夫全集」のその書簡編には、英宗に宛てた左千夫の書簡は一通も伝えられていない。

なお、左千夫と英宗との交流は、後に日本画家でアララギ派の歌人としても知られる平福百穂を介して始まつたと思つてゐる。百穂は明治三十四年に「新仏教」の同人となり、翌年から左千夫と往来するようになる。百穂の法名は生前の約束によつて英宗が選んだ程の親しい間柄であり、百穂が英宗に独自性の濃い左千夫の様子を話したことは十分に考えられるからである。